



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	小林, 快次; 山田, 久恵
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 52
Issue Date	2026-07-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100158
Type	book
File Information	MuseumNews_52.pdf





クジラの化石展 開催

from Tanaka, Yoshihiro, Kimura, Toshiyuki, Shinmura, Tatsuya, Ohira, Hiroto, and Furusawa, Hitoshi. 2025.
A new member of a large and archaic balaenid from the Late Miocene of Sapporo, Hokkaido, Japan partly
fills a gap of right whale evolution. *Palaeontologia Electronica*, 28(2): a37.



CONTENTS

- 01 新館長就任挨拶
- 02 プレスリリース
- 05 (連載)水産科学館リニューアルオープンまでの7年間
- 06 「クジラの化石展－札幌市博物館活動センターのコレクションより－」開催
- 09 2025年度卒論ポスター発表会
- 12 「博物館スタンプラリー」実施

新館長就任挨拶



2026年4月より、北海道大学総合博物館の館長を務めることになりました山内太郎です。

これまで私は、人類学・国際保健の分野において、「モノ」そのものではなく、「ヒト」、すなわち人々の暮らしや健康、そしてそれらを取り巻く環境との関係を主な研究対象としてまいりました。そうした歩みを重ねてきた自分が、標本や資料を扱う博物館の館長という役割を担うこととなったことに、不思議なご縁と同時に、大きな責任を感じております。

北海道大学総合博物館は、1999年の開館以来、本学の教育・研究成果を広く社会に発信する拠点として発展してきました。2016年のリニューアルを経て、現在では、本学の歴史を伝える展示や、各学部最先端の研究を紹介する展示、バックヤードの一端を公開するミュージアムラボ、標本に直接触れることのできる展示室、さらには多様な企画展示など、特色ある取り組みを展開しています。また、約300万点に及ぶ標本・資料を基盤とし、教育・研究・社会貢献を一体的に推進する場として、多くの方々に支えられてきました。

教育面においても、本学学生に対する講義や

演習の提供に加え、ミュージアムマイスターコースの実施、市民向けセミナーやワークショップの開催など、生涯学習の拠点として重要な役割を果たしています。さらに、札幌農学校第2農場や函館キャンパスの水産科学館など、学内各所の施設とも連携しながら、本学の知の蓄積を多面的に発信してきました。

こうした歩みの中で、本総合博物館は、学生・教職員のみならず、地域の皆さま、さらには国内外から北海道を訪れる方々にとっても、かけがえない存在となりつつあります。一方で、大学を取り巻く環境は依然として厳しく、限られた資源の中で、教育・研究・社会連携をいかに発展させていくかが問われています。

北海道大学が掲げるキャンパスミュージアム構想は、歴史的資産や自然環境、学術資料を活かしながら、大学全体を一つの「知の場」として開いていく試みです。その中核を担う総合博物館には、学術資料の保存・研究機能にとどまらず、人と人、人と社会をつなぐ結節点としての役割が強く期待されています。

博物館は単に「モノ」を展示する場所ではありません。その背後にある人々の営みや知の積み

重ねを伝え、新たな対話や気づきを生み出す場です。これまで「ヒト」を見つめてきた自分の視点を活かしながら、展示や活動を通じて、来館される皆さま一人ひとりが、自らの生活や社会、そして地球とのつながりを感じることできる場を育てていきたいと考えています。

大学の博物館は、まさに「大学の顔」であり、社会との接点です。だからこそ、専門的な知を分かち合うだけでなく、市民の皆さまとともに学び、考え、新たな価値を共に創り出していくことが重要です。

今後は、スタッフおよび関係者の皆さまと力を合わせ、これまで築かれてきた基盤を大切にしつつ、より一層、社会や市民に開かれた博物館を目指してまいります。そして、本総合博物館が、北海道大学の知を体現する場として、また地域社会と世界をつなぐ拠点として、さらに発展していくことを願っております。

皆さまのご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

山内太郎
(総合博物館長・保健科学研究院教授／人類生態学)

プレスリリース
標本庫から見つかった消息不明の新種スガワラオウギ
～約90年前にサハリン島で1度だけ採集されたマメ科ゲンゲ属～

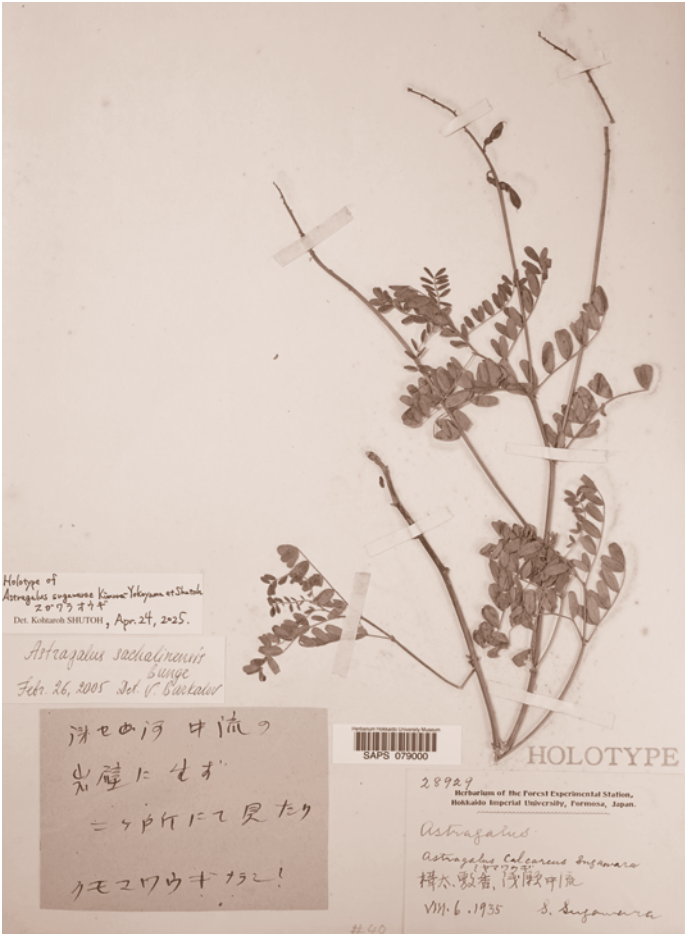


写真1
スガワラオウギのホロタイプ
(S. Sugawara 28929, 6 Aug. 1935, SAPS079000)

生きものの“新種”は、どのような場所で発見されることが多いでしょうか。少なくない読者が、基本的にはフィールド(外)をイメージするのではないかと思います。人類未踏の地という場合があれば、多くの人間が生活している都市部で見つかることもあります。森林、岩場、高山、水中、あるいは古生物標本のように地面の下など、環境も様々です。一方で、過去の研究者や採集家によって集められた膨大な生物標本を収蔵する標本庫も、しばしば新種が発見される主要な場所の一つです。

菅原繁蔵氏(1876～1967)は、戦前から戦後にかけてサハリン島や北海道で活躍した植物採集家です。芥川賞作家である寒川光太郎氏(1908～1977)の父としても知られています。菅原氏は、1921年から1940年にかけて樺太に滞在し、この短期間に32,000点に及ぶ植物標本を採集しました。なお、筆者(首

藤)は15年をかけ、ようやくこれまでに収集した標本点数が8,000に達したところです。菅原氏のペースには残念ながら追いつけそうもなく、ちょっと悔しい気持ちがあります。

菅原氏は、サハリン島における植物採集の集大成として、「樺太植物図誌(全4巻)」を、1937年から1940年にかけて刊行しました。当時同島で知られていた維管束植物種を網羅し、詳細な線画や形態的特徴を記載した名著です。この書



写真2 寒川光太郎氏により復刻された菅原繁蔵著「樺太植物誌」

籍は、1975年に「樺太植物誌」と題を改め寒川氏により復刻され、現在でも古本屋等でそれほど困難を伴わず入手することができます。この冒頭には、寒川氏による「復刻にさいして」と題された、菅原氏の植物採集に対する狂気に触れた短い名文が刻まれています。筆者も大学院生時代に1ページほどのこの短文を読み、大きな衝撃を受けたことを今でも覚えています。

菅原氏は、この「樺太植物図誌」において、複数の新種を発表しました。今回対象とした「ミヤマオウギ *Astragalus calcareus* Sugawara」もこれらのうちの一つです。サハリン島中部の石灰岩地から発見され、黄白色の花をもつことなどが主な形態的特徴とされました。菅原氏は「樺太植物図誌」に線画や詳細な形態的特徴を記載しましたが、一方で命名規約によって定められたラテン語の形態記載がないことから、この発表は無効と認識されています。その後の研究により、この「ミヤマオウギ」は、サハリン島の固有種であるシュミットソウ *A. sachalinensis* と同一の植物とする見解が提案されていました。

今回、弊館植物ボランティアの横山(木村)耕さんと筆者は、この「ミヤマオウギ」の正体を確かめることを目的に研究を行いました。総合博物館陸上植物標本庫(SAPS)、北方生物圏フィールド科学センター植物園、市立函館博物館で、菅原氏が「ミヤマオウギ」と同定した標本を探索し、シュミットソウなどをはじめとした既知の類似種と形態が同じか異なるか検討しました。その結果、「ミヤマオウギ」の標本は黄白色の花と無毛の豆果をもち、葉の両面に白毛が密生していました。これらの特徴は既知種のいずれとも形態的に異なっていました。諸事情から和名・学名を改め、この植物を新種「スガワラオウギ *Astragalus sugawarae* Kimura-Yokoyama & Shutoh」として発表しました。詳細についてはプレスリリース(<https://www.hokudai.ac.jp/news/2025/10/901.html>)をご覧ください。

首藤光太郎
(研究部助教／植物体系学)

書誌情報
Kimura-Yokoyama O & Shutoh K. 2026. A new vascular plant species from Sakhalin, *Astragalus sugawarae* Kimura-Yokoyama & Shutoh (Fabaceae), based on redescription of an invalid protologue. Journal of Asia-Pacific Biodiversity 19(1): 109–116. doi: 10.1016/j.japb.2025.08.001

プレスリリース

「鳥のような首」は恐竜から始まっていた



恐竜から鳥へ、首の動きの進化。恐竜では主に2か所だった可動部分が、鳥に近い恐竜を経て、現生の鳥では3か所へと増え、よりしなやかな首の動きが可能になった。

恐竜から鳥への進化の中で、「首の動き」はどのように変わってきたのでしょうか。この問いに対し、北海道大学大学院理学院博士後期課程の宇津城遥平氏と北海道大学総合博物館の小林快次教授による研究により、骨の形から動きを読み解く新しい手法が開発されました。絶滅した動物の首の動きを推定できるこの研究は、恐竜と鳥の進化を理解する上で重要な成果です。

これまで、化石からは骨の形はわかっても、実際にどのように動いていたのかを知ることは困難とされてきました。特に恐竜のような絶滅動物では、首がどの程度曲がり、どの方向に動いていたのかを直接確かめることはできません。そのため、首の動きの進化については長い間、明確

な答えが得られていませんでした。また、動きそのものは化石として残らないため、骨の形をもとに間接的に推測するしかなく、研究には大きな制約がありました。

本研究では、こうした課題を解決するために、骨の形から「動きやすさ」を読み取る方法が考案されました。これは、同じ力で関節を動かしたときにどれだけ大きく動くかを数値として表すもので、「関節可動効率」と呼ばれています。この考え方により、骨の形に含まれる情報から、首の動きの特徴を具体的に推定することが可能になりました。さらに、この方法は筋肉の動きを単純なモデルとして捉えることで、形と動きの関係をわかりやすく示している点にも特徴があります。

研究ではまず、現代に生きるワニと鳥の首の

骨を詳しく調べました。その結果、ワニでは首の前と後ろの2か所、鳥では前・中央・後ろの3か所に、特に大きく動く部分があることがわかりました。この分布は実際の動きともよく一致しており、骨の形から動きの特徴を読み取る方法が有効であることが確認されました。

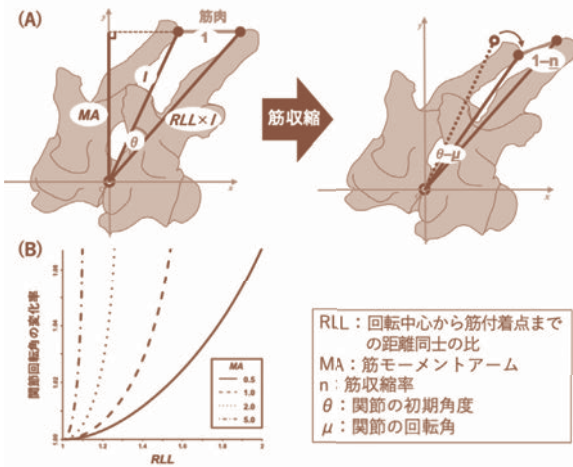
さらに、この手法を恐竜の化石に応用したところ、種によってワニに近いタイプと鳥に近いタイプがあることが明らかになりました。特に鳥に近いグループの恐竜では、首の中央も大きく動く可能性が示され、鳥のようになややかで複雑な動きをしていたと考えられます。この結果は、恐竜の多様な行動や生活様式を理解する上でも重要な手がかりとなります。

これらの成果は、鳥の特徴的な首の動きが、鳥になってから突然生まれたものではなく、すでに恐竜の時代から少しずつ進化していたことを示しています。つまり、私たちが日常的に目にする鳥のしなやかな動きの一部は、はるか昔の恐竜にその起源があるということです。

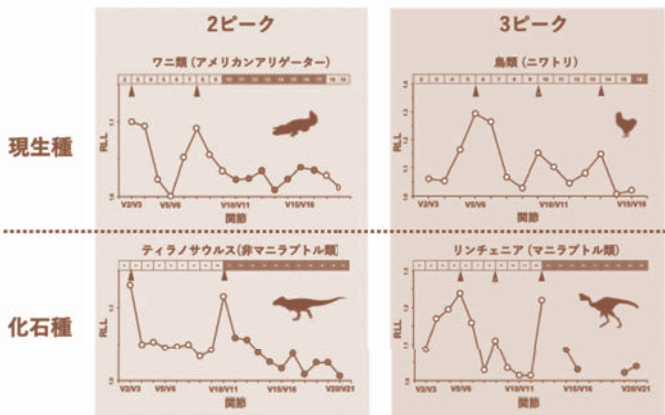
今回開発された手法は、首だけでなく、手足や体の動きの解明にも応用できると期待されています。これまでわからなかった「どのように動いていたのか」という点に迫ることで、動物の進化や暮らしぶりをより具体的に理解できるようになります。本研究成果は、2026年1月27日に形態学の専門誌Journal of Morphologyに掲載されました。

小林快次

(研究部教授／古生物学)



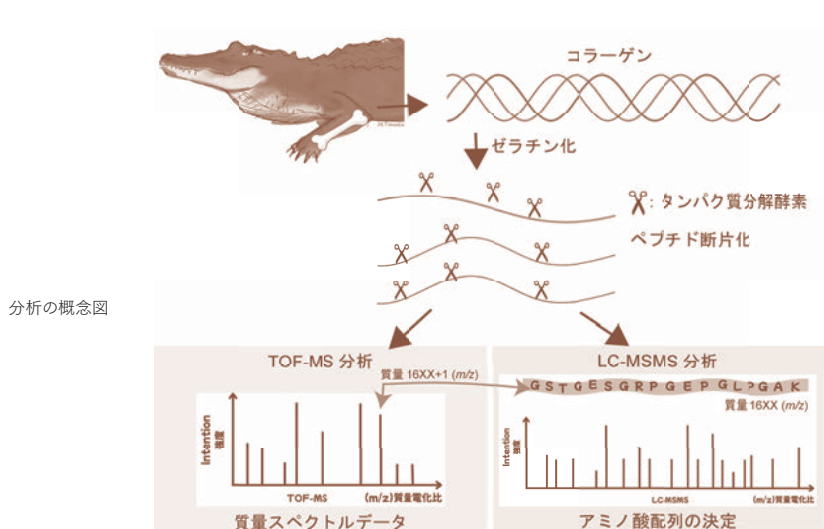
骨の形から関節の動きを推定するモデル。(A)筋肉の収縮によって関節が回転する仕組み。骨の形(RLL)が大きいほど、同じ力でも関節は大きく動く。(B)骨の形と関節の動きの関係を示したグラフ。RLLが大きいほど、関節の回転量が増える。



首の中で「よく動く部分」の違い。ワニでは前と後ろの2か所、鳥では前・中央・後ろの3か所に、特に大きく動く部分がある。恐竜では、種類によってワニ型と鳥型の両方の特徴が見られる。

プレスリリース

コラーゲンの質量分析による遺跡出土ワニ類の同定に成功 ―ワニ類を対象とした初報告―



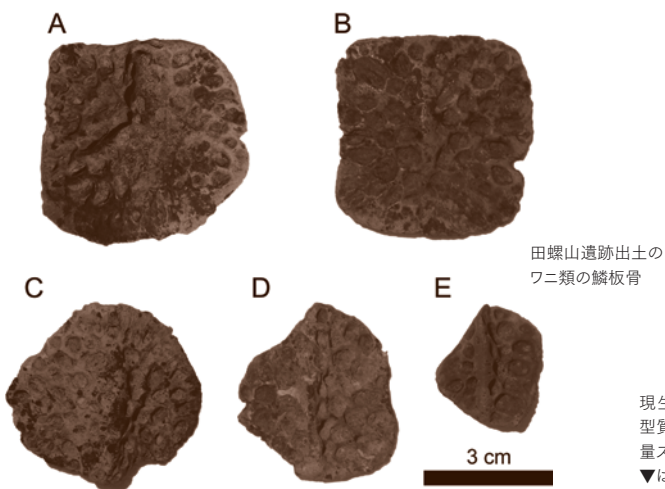
ワニ類は熱帯から亜熱帯の水域に生息する大型爬虫類です。中国では、様々な遺跡からワニ類の骨がみつっていますが、頭骨を除き種の特定は困難でした。とくに浙江省余姚市に位置する田螺山遺跡(約7,000～5,500年前)では、多数のワニ類の骨がみついています。現在、同遺跡周辺の長江下流域にワニ類は生息していませんが、この遺跡が形成されたころの気候は現在より温暖でした。そのため、以下の3種のワニ類が遺跡周辺に生息していた可能性があります。

・ヨウスコウワニ：人為的影響により現在は中国安徽省のごく一部のみに生息しています。しかし、1920年代までは長江流域のより広い範囲に生息していたことが分かっています。
・イリエワニ：かつて広東省と海南省に生息していました。温暖期にはより北方の長江下流域にも生息していた可能性があります。

・*Hanyusuchus sinensis*(絶滅種)：青銅器時代(3,300～2,900年前)の中国南部・広東省の遺跡から発見されています。マレーガビアルやインドガビアルに近縁と考えられています。

本研究では、骨中コラーゲンの質量分析(図1)によって東アジアに生息する現生ワニ3種(ヨウスコウワニ、マレーガビアル、イリエワニ)の識別基準を作成し、この基準に基づいて田螺山遺跡から出土したワニ類の骨の種の特定を試みまし

た。
3種のワニの骨標本から約1mgの骨粉を採取して、コラーゲンを抽出・酵素(トリプシン)処理を施し、飛行時間型質量分析計で質量スペクトルデータを得ました。合わせて、液体クロマトグラフ質量分析計でペプチド断片のアミノ酸配列を決定しました。また、田螺山遺跡から出土した下顎骨3点と鱗板骨(背中の骨)5点(図2)から骨粉



田螺山遺跡出土のワニ類の鱗板骨
現生ワニ3種の飛行時間型質量分析で得られた質量スペクトルデータ
▼はバイオマーカーを示す

を採取して同様に分析しました。

現生骨標本の分析の結果、ヨウスコウワニ、イリエワニ、マレーガビアルの各種の特定に有効な特徴的なペプチド断片(バイオマーカー)が確認され(図3)、この方法で3種の現生ワニ類が識別できることが示されました。田螺山遺跡出土資料の分析では、確認されたバイオマーカーはヨウスコウワニのものと一致することが分かりました。このことから、約7,000～5,500年前に田螺山遺跡でヨウスコウワニが利用されていたことが明らかになりました。

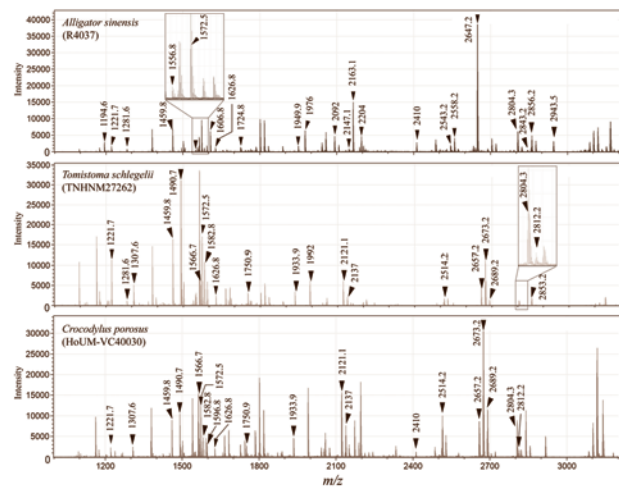
本研究は、骨中コラーゲンの質量分析による種の特定がワニ類でも可能であることを初めて明示したものです。本研究の成果を利用して様々な遺跡から出土したワニ類の骨の種が特定されることで、東アジアで利用されたワニ類の多様性と、その文化的利用の様相がより詳細に分かるようになることが期待されます。また、現生ワニ類のデータを蓄積することで、東アジア以外の遺跡から出土した骨や化石にも応用できるようになると期待されます。

江田真毅

(研究部教授／動物考古学)

論文情報：

論文名／Identification of East Asian Crocodylian Collagen from the Tianluoshan Archaeological Site of China(中国田螺山考古遺跡における東アジアワニ類のコラーゲンによる同定)
著者名／田中望羽¹、江田真毅²、小林快次²、泉 洋江²、菊地大樹³、孫 国平⁴(¹北海道大学大学院理学院、²北海道大学総合博物館、³蘭州大学考古学及博物館学研究所、⁴浙江省文物考古研究所)
雑誌名／Journal of Archaeological Science: Reports(考古学の専門誌)
DOI／10.1016/j.jasrep.2026.105642
公開日／2026年2月19日(木)(オンライン公開)



プレスリリース

ミトコンドリアゲノム解析で発見された“隠れた種多様性” —小笠原諸島のリクヒモムシ、広域分布種とは異なる系統を確認—

これまで小笠原諸島のリクヒモムシは、パラオからの原記載以降、世界の熱帯～亜熱帯の島々に広く分布するとされる*Geonemertes pelaensis* Semper, 1863 と同一種と考えられ



1980年代に父島で川勝正治博士(元・藤女子大学教授)によって採集されたリクヒモムシの液浸標本。ナチュラリス生物多様性センター(オランダ・ライデン)収蔵

てきました。しかし、近年の研究で、小笠原産の個体は他地域のリクヒモムシとは餌の選好性が異なることが明らかになり、小笠原諸島の陸上生態系への影響が懸念されていました。

紐形動物は外部形態だけで種を見分けることが難しい動物です。ところが、これまで小笠原産リクヒモムシの種同定は長らく形態情報のみに基づいており、DNA情報が得られていませんでした。そこで本研究では、小笠原諸島と沖縄県与那国島に生息するリクヒモムシを対象に、ミトコンドリアゲノムに基づく分子系統解析と外部・内部形態の詳細な比較を行いました。

その結果、日本国内には小笠原系統と広域分布系統という、種レベルで異なる2つのグループが存在することが明らかになりました。小笠原系統は、太平洋～大西洋の島々に広く分布する広域分布系統(与那国島を含む)とは、ゲノムサイズ・遺伝子配置・形態特徴のいずれにおいても大きく異なっていることが分かりました。

さらに、1980年代に父島で採集され、現在はオランダのナチュラリス生物多様性センターに収蔵されている博物館標本(図)を再調査したところ、現在の小笠原産個体とほぼ同一の特徴をもつことが判明しました。これにより、小笠原には少なくとも半世紀以上前から同じ系統が定着し続けていた可能性が強く示されました。

本研究は、これまで見落とされがちであった小型無脊椎動物の中に“隠れた種多様性”が存在することを明らかにしただけでなく、継続的なフィールド調査と博物館資料の活用を組み合わせた長期的モニタリングが島嶼生態系の保全に重要であることを示しました。

本成果は、「BMC Ecology and Evolution」に2025年12月19日付で掲載されました。

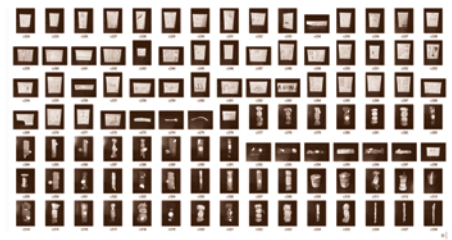
柁原 宏

(資料部長・資料部研究員・理学研究院教授)

(連載) 水産科学館リニューアルオープンまでの7年間

第2回 移転準備作業の舞台裏

2021年の仕事納めの日、新施設整備に向けた予算化が決まりました。年明け早々には、水産学部、函館キャンパス事務部・図書館、施設部、総合博物館の関係者によるタスクフォースが立ち上がり、新施設の設計や運営についての議論が始まりました。しかし、2022年2月に始まった口



非常勤職員の齋藤さんと伊藤さんが、資料のクリーニング、写真撮影、目録作成、梱包作業を担当しました(上、左下)。シャチの頭骨展示台の内部からは、思いがけずクジラの頭骨が見つかったりもしました(右下)。

シアによるウクライナ侵攻の影響で、建設資材や人件費が急騰し、計画は何度も見直しを迫られました。新型コロナウイルスによる混乱が落ち着きつつあった矢先の予想外の事態でした。

こうした中で最も大きな課題となったのが、展示資料の移設費用をいかに抑えるかでした。専門業者に見積もりを依頼すると、とても実現できないほどの高額な費用が提示されました。その背景のひとつに、60年以上の歴史をもつ水産科学館の資料全体が十分に把握されておらず、作業量・必要人員を見積もれないという事情がありました。そこで、まずは資料の調査と整理に着手しました。館内各所に保管された膨大な資料を前に途方に暮れましたが、館内会議で苦境を訴えた結果、非常勤職員の増員が認められ、3人で作業にあたる体制が整いました。資料の撮影や簡易データベース化、梱包作業を分担したことで、作業は大きく前進し、結果的に移設費用の大幅な削減にもつながりました。

さらに大きな難関となったのが、液浸標本展示の撤去でした。大型アクリル水槽や標本瓶に収められた魚類や無脊椎動物を標本庫に戻すため、ホルマリン廃液の処理が必要となりまし



家庭用のバスポンプに約20メートルのホースを接続し、ホルマリンを屋外の廃液タンクへ排出しました。処理には時間を要しましたが、作業者が室内に長時間とどまる必要がなくなり、ホルマリンへの曝露リスクを大幅に軽減することができました。

た。劇物であるホルマリンの取り扱いには細心の注意が求められます。研究室の学生たちの協力を得て、家庭用バスポンプを改造して作業を半自動化し、室内での作業時間を最小限に抑えながら、4日間で約2,500リットル(!)の廃液を処理しました。

こうして多くの人の協力によって、新施設への移転準備は着実に進んでいきました。

(次回に続く)

田城文人

(研究部助教／魚類分類学)

「クジラの化石展－札幌市博物館活動センターのコレクションより－」開催

●2025年9月12日～2026年1月25日



展示設営の様子

2025年9月12日から2026年1月25日まで、北海道大学総合博物館企画展示室において企画展「クジラの化石展」を開催しました。本展は2025年8月に新属新種となったサップロクジラの学術的価値と、札幌市における博物館計画を広く公開することを目的として実施した、札幌市博物館活動センターの制作した巡回展示でした。オープニングセレモニーでは、総合博物館の首藤光太郎先生の司会のもと、湯浅万紀子副館長と札幌市市民文化局の知野学局長にご挨拶いただき、除幕していただきました。

展示では、サップロクジラについて発見、発掘、研究を紹介しました。また、沼田町化石館および足寄動物化石博物館など道内で新種の基準であるタイプ標本をもつミュージアムを、タイプ標本のレプリカとともに紹介しました。これらのレプリカは25年の間に収集した札幌市博物館活動センターの収蔵品です。札幌市の博物館計画や、植物標本なども展示し、あたらしい



オープニングセレモニーは大勢のカメラが見つめる中、華やかに行なわれました。

研究成果を発信しつつ、博物館文化とは何か考えていただくことを目標といたしました。会期中の入館者数はおよそ94,000人と伺っています。

この企画展は、博物館ボランティアの皆さんとミュージアムマイスターコースの受講生のみさんの協力をうけて成立させることができました。化石グループの皆さんには展示の設営・製作・撤収、サップロクジラの模型制作もいただきました。また、会期中は展示解説グループの方々が解説に取り組みれ、ミュージアムマイスターコースの受講生のみさんによりアドバイスを与えて下さいました。受講生のみさんのまとめレポートは、総合博物館ホームページで紹介されています。これらと毎回のレポートを通して、受講生の皆さんが興味をもち、調べ、工夫し、実践を通して成長された様子を知ることができました。この企画展は想いを持つおおぜいの方々によって運営されました。ありがとうございました。

田中嘉寛

(札幌市博物館活動センター学芸員・北海道大学総合博物館資料部研究員)

第5回建築の学生展

●2025年11月1～3日・5～7日



体験型展示の展示風景

工学部建築都市コースの学生有志が授業で制作した模型や図面を展示し、来場者に学生自身が解説する企画展「建築の学生展」を、2025年11月1日(土)～11月7日(金)(4日は休館日)に開催しました。本企画展は、学生と来場者の対話を重視したインタラクティブさが大きな特徴です。2019年からスタートして5回目となった今回は、2026年度に創基150周年を迎える北海道大学のバーチャルキャンパス事業の一環として、バーチャル空間と現実を繋ぐ「体験型展示」にも挑戦しました。バーチャル(virtual)はリアル(real)と対の概念として捉えられがちですが、私たちは



自身の作品を解説する建築学生

バーチャルを、実と虚、あるいは何かと何かの間を“つなぐもの”であると考えました。今回の展示ではバーチャルを媒介とすることで、鑑賞者(来



オリジナル仕物の設計の様子

場者)と制作者(学生)という固定的な立場を越境し、お互いの立場や視点が「まじる、まざる。」ことを目指し、展示内容や構成を考えました。

このコンセプトのもと、学生が作品の展示・解説を行い、さらに来場者が設計プロセスを追体験できる「体験型展示」を企画しました。来場者は、建築学生が実際に使用するソフトウェアを用いてオリジナル仕物をデザインし、制作したモデルが実空間で模型として制作・展示されるだけでなく、バーチャル空間にも反映・蓄積されていく仕組みを構築しました。会場とバーチャル空間に次々と個性的な椅子やテーブルが並んでいく様子は壮観であり、また来場者も建築学生の普段の

設計の一端を感じつつ、製作者と鑑賞者が「まじる、まざる。」ことにより、一体感のある展示空間をともに創出できたと感じています。本展示会は、文学部・工学部3年から工学院修士2年までのプロジェクトメンバーの学部・学年を越えた協働によりつくりあげられました。6日間で3500人超の方にご来場いただき、来場者、参加学生の両者が楽しめる展示会になったと感じています。

本活動は、実際の博物館で展示を制作する非常に貴重な機会であるとともに、普段は交わることが少ない他学年や他学部、専門外の方々と意見を交わすことができ、非常に刺激的な経験となりました。また、建築分野だけでなく博物館の先生方との展示方法や運営管理の面における関わりからは、多くの学びを得ることができました。本企画展の一連の活動は最終報告書にまとめ、この成果を活かして、第6回開催に向けて準備を進めていきたいと思います。

高山拓実

(工学院修士1年)

担当学生：

奥澤鼓太郎・作道巧・佐々木郁乃・清水章太郎・波瀬礼央・三宅聡彦(工学部3年)
鶴川太希・大友堅心・寺井柊人・福岡花梨・三谷京子・三橋優祐・山之内淳(工学部4年)
秋元優花・木村彰人・高山拓実・田中美帆・田淵あかり・宮村夢音・村上凛(工学院修士1年)
金子千裕・堀下葵・松下鯉太郎・山田悠介(工学院修士2年)
北川りさ・瀧澤文音(文学部3年)

担当教員：

加持亮輔・渡部典大(工学研究院)
北野一平・中沢祐一・湯浅万紀子(総合博物館)
今村信隆・卓彦伶(文学研究院)

担当職員：

大杉あい・福岡久典・山口恵理子(総合博物館)



プロジェクトメンバー(1日目開催時)

「ヒグマ×北大クマ研展 ～大きな足跡、小さな一歩～」開催

●2026年2月7日～3月29日



ヒグマ剥製など展示の様子

2026年2月7日から3月29日までの51日間、企画展「ヒグマ×北大クマ研展～大きな足跡、小さな一歩～」を開催しました。期間中たくさんの方にご来場いただき、ヒグマの生態や研究についての展示を楽しんでいただきました。昨今なにかと世間を騒がせているヒグマですが、「怖い」「危ない」といったイメージばかりが先行しているように思います。今回の企画展では、市民や観光客の方々に普段ニュースで目にするものとは違う、ヒグマの魅力を知ってほしいという思い

で展示を企画しました。

展示の目玉の一つはヒグマの冬眠穴の模型で、北大ヒグマ研究グループ(クマ研)が調査で実際に発見した冬眠穴がモデルとなっており実物通りに再現しました。実際に来場者が冬眠穴模型の中に入ることができ、数ヶ月間厳しい冬を乗り切るヒグマのユニークな生態である冬眠を体感していただきました。かなり大型の展示物のため製作・運搬時はかなり苦労しました

が、多くの方に楽しんでいただくことができ、苦労した甲斐がありました。また、50年以上にわたってヒグマの生態研究を行ってきた北大クマ研の歴史や調査成果を紹介する展示もあり、北大クマ研の活動を多くの方に知っていただくことができました。さらに、共催いただいたNHK札幌放送局が制作した'北大クマ研物語'のビデオ上映や展示期

間中に開催された土曜市民セミナーを含め研究の面白さを伝えることができました。企画展の開催にあたり、多くの方々にご協力を承りました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

高瀬 大地

(北大ヒグマ研究グループ)

坪田 敏男

(資料部研究員・名誉教授)



ヒグマの冬眠穴の模型

チセリウス電気泳動装置の化学遺産認定



認定証の楯

電気泳動装置は、電場中で荷電粒子が移動する性質を利用して、試料の成分を分離・検出する分析装置です。現在では小型化が進んでいますが、かつての電気泳動装置は、シュリーレン法という観測手法に必要な光学系と恒温槽を備えていて、たいへん大型でした。発明者の名前にちなみ、Tiselius装置と呼ばれます。国内で

は、1950年に日立製作所が製品化した「HT-B型チセリウス電気泳動装置」が普及しました。

1964年から1983年まで北海道大学医学部生化学第一講座の教授を務めた平井秀松は、1947年に日本で初めてTiselius装置の製作に成功し、日立製作所による製品化にも貢献しました。北海道大学総合博物館では、平井の研究室で使用されていた1965年日立製作所製「HTB-2A型チセリウス電気泳動装置」を2階エレベーター付近に展示しています。重量115 kg、全長1.8 mに及ぶ大型機器で、2007年に北海道大学医学部から当館へ移設されました。そしてこのたび、本機は公益社団法人日本化学会により化学遺産に認定されました(認定化学遺産第075号)。2026年3月18日に開催

された日本化学会第106春季年会(日本大学船橋キャンパス)での表彰式には、坪田敏男館長(当時)が出席し、認定証楯をいただきました。ご推薦くださった防衛医科大学校の三浦賢司先生、ならびに保存継承に尽力された多くの関係者の方々に感謝申し上げます。

久保 大輔

(研究部准教授／生物人類学)



日立製作所製HTB-2A型チセリウス電気泳動装置(当館2階に展示)

2025年度卒論ポスター発表会

●2026年2月28日～3月1日



発表会の様子

総合博物館では独自の教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」の一環として、平成20年度より「卒論ポスター発表会」を開催しています。学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめて、さまざまな年代の市民や観光客の方々、他分野の学生や教職員にわかりやすく発表し、質問に受け答えます。北大生の研究を広く社会に伝えるだけでなく、学生のコミュニケーション能力の向上や他分野の研究への関心の喚起を図り、大学博物館への理解を深めることを目的としています。18回目を迎えた今年度は、2月28日(土)・3月1日(日)に総合博物館1階「知の交流」ホールにて新型コロナウイルス感染防止対策を行ったうえで開催しました。



発表者一同(一名病欠)

ポスターとWebサイトで発表者を募集した結果、ポスター発表には農学部・理学部・文学部

から7名の4年生が参加しました。発表者は、卒業研究を市民に発表するために発表内容やポスターを見直し、他学部の発表者や博物館担当教員と議論する中間発表会3回とリハーサルを通して、専門分野外の方々にも伝わるように発表方法を学んでいきました。当日は、年代も関心もさまざまな来場者の方々に分かりやすく説明しようと努力し、質問に丁寧に答え、来場者との対話を楽しむことができました。来場者の方々は、学生たちの発表に引き込まれた様子で、質問や感想を多数お寄せくださいました。また、今回初めて番外編として、大阪大学理学部4年生が、発表会両日のお昼休みにポスター発表を行いました。この学生は、昨年度の卒論ポスター発表会に来場し、講評会にて「大阪大学にこのような機会がなく羨ましい、来年度は阪大生として発表したい」と述べていました。そして2月に、実際に発表を希望し、審査対象となる北大生の発表者とは分けて昼休み時間のみの発表という条件で、特別に発表してもらいました。

発表会の運営には文学院・保健科学院・水産学部・総合教育部理系から4名の大学院生・学部生が参加

発表会当日の様子や参加した学生の事後考察レポートは、当館ホームページで公開しています。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/list/21954/>
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/list/22030/>



運営スタッフ一同

しました。運営スタッフとして発表会の広報、運営方法の検討を進め、会場の設営ではポスターの配置からライティング、また室内の換気に至るまで柔軟に対応し、当日の発表がスムーズに進むように工夫を重ねました。運営担当学生は、当日の受付や授賞式の司会を担当した他、発表者の研究のポイントやプロフィール、博物館の見どころなどを掲載したリーフレットや発表会の特色を表現した広報ポスターを制作し、その充実した内容と洗練されたデザインは多くの方からご好評をいただきました。

最終日には、2日間の来場者の投票による「来館者賞」、市民4名と本学教職員6名及びミュージアムマイスター6名の審査員による「最優秀賞」・「SDGs賞」・「ミュージアムマイスター賞」が選定されました。授賞式では受賞者に賞状、発表者全員に記念品が授与され、16名の審査員一人一人から、ご講評と今後の研究に向けての励ましの言葉をいただきました。

北野一平

(研究部助教／岩石鉱物学)



発表会後の集合写真

2025年度後期ミュージアムマイスター認定式



今後の抱負を述べる新マイスターの宮本さん

総合博物館では、本学が目指す全人教育の一端を担う教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」を2009年度より展開しています。2025年度後期に宮本 英昌さん(公共政策大学院2年)が新たに認定され、これまでに

ミュージアムマイスターに認定された学生は65名となりました。

2025年度後期分のミュージアムマイスター認定式は、2026年3月23日に開催された総合博物館令和7年度研究・活動報告会にて執り行わ

れました。坪田敏男館長より認定証が授与されたのち、宮本さんから新ミュージアムマイスターとしての抱負と今後の活動予定が語られました。研究・活動報告会にご出席いただいた皆様から新マイスターの宮本さんに温かいお祝いの拍手が送られました。新たな場でご活躍されることを期待しております。今後もミュージアムマイスターたちの活躍に目が離せません。

ミュージアムマイスター認定コースについての詳細は、総合博物館のウェブサイトをご覧ください。

北野一平

(研究部助教／岩石鉱物学)

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/>

2025年度 博物館主催ボランティア講座&交流会

●2026年1月24日



交流会に参加いただいたボランティア、受講生、先生方

2025年度の「ボランティア講座」はボランティアのみさんだけでなく、ミュージアムマイスターコースの展示解説プロジェクトに参加した受講生のみさんにも参加し、総合博物館の資料部研究員で札幌市博物館活動センター学芸員の田

中嘉寛のファシリテートで、企画展「クジラの化石展－札幌市博物館活動センターのコレクションより－」を総括いたしました。9グループから20数名の方にご参加いただきました。企画展に関わられたボランティアと受講生のお一人お一人

から、活動に参加された動機やどのような気持ちだったか、語っていただきました。「展示づくりは初めて」「展示のアイデアを考えて提案できた」「来館者から特別な時間を過ごすことができた」といったなど企画展をとおりて印象に残った出来事をお話いただきました。みなさんの「だから楽しかった」という言葉と、そうおっしゃられた時の笑顔が印象的でした。この企画展は想いを持つおおぜいの方々によって運営されました。私自身、この企画展をとおりて来館者を含めて多くの方々と交流し「博物館の文化ってなんだろう」という日頃の考え事に対して、体験を伴った深い理解に達したと感じました。ご参加くださったみなさん、ボランティア講座&交流を運営いただきました湯浅万紀子先生にお礼申し上げます。

田中嘉寛

(札幌市博物館活動センター学芸員・北海道大学総合博物館資料部研究員)

蛍光鉱物観察会開催

●2025年8月16日



蛍光鉱物観察会の様子

2025年8月16日(土)13時30分から16時30分まで、5名の地学ボランティアとともに総合博物館3階実習室にて「蛍光鉱物観察会」を開催しました。当館に収蔵されている鉱物標本とボランティアの方の私物標本1点に紫外線を照射して美しく光る蛍光の様子を観察しました。緑色に蛍光する北海道石・燐灰ウラン石・燐重土ウラン鉱・珪亜鉛鉱、オレンジ色に蛍光する方解石・



蛍光鉱物観察会の様子

ソーダ石・ハックマナイト、赤色に蛍光するルビー、青色に蛍光する蛍石、黄色に蛍光するカルパチア石・ウェルネル石(地学ボランティアの方の私物)、そして多彩に色づくピチューメンを含むオパールなど様々な蛍光色を示す標本を選定しました。白色LEDライトで通常の見た目を観察したのちに、紫外線を当ててまさに魔法ように神秘的に輝く姿に感嘆の声が上がり、蛍光現象や鉱物に関する質問や感想を多くいただきました。見て楽しめるコンテンツとして、外国人の来場者にも満足いただけたかと思えます。また、今回は来場者の方に紫外線を当てていただくような体験型コーナーも設け、お子さんを中心に好評でした。約150名の方々にご来場いただき、盛況のうちに無事に終えることができました。蛍光観察会を通して来場者に少しでも鉱物・岩石に興味を持っていただけたのであれば、うれしく思います。このような蛍光観察会は2回目で、現時点では不定期に実施していますが、今後は定期的な開催を検討していきます。

北野一平

(研究部助教／植物体系学)

宇宙の4Dシアター公演『おいしい宇宙のはなし』

●2025年8月16日

2025年8月16日(土)に宇宙の4Dシアターボランティアにより、「おいしい宇宙のひみつ」と題したプラネタリウム公演が総合博物館1階講演室にて行われました。13:30、14:30、15:30から3回公演し、13時にすべての回の整理券を配布して定員25名としていました。大変ありがたいことに、整理券配布開始早々に第1回目と第2回目の整理券がほとんどはけてしまい、最終的にすべての回で満員御礼となりました。

公演では、まず時空を超えて夜空や宇宙空間を映し出すMitakaというソフトに慣れてもらうために、現代の札幌の空から4700年前の縄文時代の夜空にタイムスリップしました。現代と縄文時代では北極星の位置が異なり、地球自転に伴う運動(歳差運動)により移動していることが説明されました。その後、七夕の話から「織姫星」にあたること座の1等星ベガと「彦星」にあたるわし座の1等星アルタイルを含む「夏の大三角」を観察しました。そして、「天の川」に舞台が移され、実は、私たちが普段見ている「天の川」



公演前の様子

うガスにより光がさえぎられているためです。こうして、どら焼きという「おいしい宇宙のひみつ」が明かされました。

北野一平

(研究部助教／植物体系学)



公演前の様子

「博物館スタンプラリー」実施

総合博物館は北海道大学サスティナビリティ推進機構と共同して、1月6日より「総合博物館スタンプラリー」を開始しました。このスタンプラリーは、2025年11月3日に開催されたサスティナビリティ推進機構およびSTV札幌テレビ放送共催の「SDGsデー2025」にあわせて制作されました。サスティナビリティ推進機構の協力の下、総合博物館にてそれを常設運用しました。専用の台紙に6つのスタンプを重ね押すことで、総合博物館をモチーフとした絵柄が完成します。各スタンプを常設展示エリアの6か所に配置しており、館内の展示を観覧しながらスタンプラリーを楽しむことができます。スタンプラリーの専用台紙は、総合博物館正面出入口付近の募金箱またはPayPay QRコードにてご寄附いただいた方(寄附金額は任意)が、受付から受け取ることができます。来館記念として、海外旅行者をはじめ多くの来館者にご好評をいただいています。ぜひスタンプラリーを楽しみつつ、当館の運営にご協力いただければ幸いです。スタンプラリーについての詳細は、総合博物館のウェブサイトをご覧ください。

首藤光太郎

(研究部助教／植物体系学)

北野一平

(研究部助教／岩石鉱物学)



博物館スタンプラリーの案内ポスター

令和7年度研究・活動報告会

●2026年3月23日

令和7年度北海道大学総合博物館「研究・活動報告会」が、令和8年3月23日に開催されました。本報告会は、坪田敏男館長の挨拶に始まり、湯浅万紀子研究部長による全体報告へと続き、この一年の成果が一望できる場となりました。研究部では田城文人助教、中沢祐一准教授がそれぞれの専門分野から研究成果を発表し、資料部では小澤丈夫資料部長による全体報告に続き、大原雅資料部研究員がご自身の研究を紹介しました。多様な分野の知が交差し、博物館ならではの研究の奥行きが感じられる内容となりました。さらに、学生・大学院生による発表では、金子和広さん、徳井翠さん、矢倉鉄平さんが登壇し、日頃の研究成果を発信しました。若い研究者の視点と熱意が会場に新たな活気をもたらしました。休憩後には、在田一則ボランティア会長による報告や、辻野淳子さんによる活動報告が行われ、博物館を支える多様な取り組みが共有されました。あわせて、長年にわたり活動に貢献されたボランティアの表彰(5年・10年)およびミュージアムマイスター認定式も実施され、その功績が称えられました。終盤には、坪田館長および湯浅教授による退職の挨拶があり、これまでの歩みと今後への期待が語られました。本報告会は、研究・教育・社会貢献が一体となった当館の活動を改めて示すとともに、次の発展へとつながる重要な機会となりました。

小林快次

(研究部教授／古生物学)



報告会の様子

ボランティア表彰

●2026年3月23日

総合博物館では、活動継続5年、10年の節目を迎えられた方を対象とした表彰式を毎年執り行い、博物館活動に協力いただいたことへの感謝の意をお伝えしています。

現在は総合博物館14分野と水産科学館のボランティアグループが活動しています。2025年度は、活動継続5年を迎えられた方が6名、10年を迎えられた方が8名いらっしゃり、表彰式には2名の方がお越しくださしました。表彰式は、活動・研究報告会で行い、坪田敏男館長(当時)から出席者に直接感謝状が手渡され、当日ご欠席の表彰者の方々には後日感謝状をお送りしました。

今回表彰を受けられた方々を含め、ボランティア活動10年継続者のお名前は博物館3階廊下に掲示しております。ご来館の際には是非ご覧ください。

当館の活動にご協力いただいている事を改めて感謝申し上げます。

山田 久恵

(事務部主任)



表彰の様子

ご挨拶 退任の 挨拶

2026年3月末で北海道大学を定年退職しました。それに伴い総合博物館長の職も退任いたしました。3年間の短い期間でしたが、大変お世話になりました。この3年間は私にとってかけがえのない貴重な経験を積むことができ、とても充実した時間だったと考えています。博物館にとれだけ貢献できたかについてはかなり心許ない部分がありますが、博物館の教職員やボランティアの方々の力を借りて一つ一つ課題に取り組んだつもりです。北大総合博物館の歴史にほんの小さな一歩を記すことができたことを喜びたいと思います。

博物館長時代の印象深い思い出としては、やはり2回の企画展示に関わったことでした。特に1回目の‘ホッキョクグマ展’は、展示の知識がまったくない中での準備作業でしたので、他の先生や研究支援推進員の皆様のサポートがなければ成すことはなかったと思います。その中で、たくさんの方に来館いただき、博物館が賑わっている姿を見て企画をしてよかったなと思ったものでした。2回目の‘ヒグマ×北大クマ研展’は、クマ研の学生の頑張りにより私はだいふ楽をさせていただきました。定年退職間際の最後の仕事として関わったことは北大在職時の仕事としても印象深いものとなりました。

今や年間30万人近い市民や観光客が訪れる大学博物館にまで発展を遂げました。これは、歴代の館長ならびに教職員のたゆまぬ努力の成果だと思います。これからも大学の顔として知的好奇心や魅力溢れる、そして市民に愛される大学博物館として発展されんことを願っております。

坪田 敏男

(資料部研究員・名誉教授)



北海道大学を初めて訪れたのは、平成18年6月、学術交流会館で開催された第1回博物科学会で、前職の東京大学総合研究博物館の研究者として発表した時のことです。歓迎して下さった当時の総合博物館の藤田正一館長をはじめ関係者の方々の温かさとキャンパスの美しさに感激致しました。その年の11月に、国立大学では初めての博物館教育を専門とする教員として総合博物館に着任致しました。

その後20年近く、教育と研究、博物館活動に取り組んでまいりました。広報担当の総長補佐を務めたことも貴重な経験でした。教育面では、高橋英樹名誉教授が創設されたミュージアムマイスター認定コースを中心に、大学博物館の重要な特色となる大学生を対象とした教育プログラムを展開できました。研究面では、日本では初めて、ミュージアム体験の意味をライフヒストリーに関連づけて体系的に調査してミュージアムの存在意義を考察する研究を、来館者に限定せずにボランティアや友の会会員、スタッフ、設置主体、観光関連部局などその関与者を対象に、科学研究費の助成を継続して受け取り組みました。博物館活動については、主としてアウトリーチとボランティア・マネジメントを担当し、登録を希望される方々へのガイダンスを担当したため、担当した展示解説グループ以外の方々ともお近くに接してその後の活動の様子を伺えたことは大変幸運でした。

いずれも、歴代の館長をはじめ教職員の方々と学内外の多くの協力者に支えられて実現できたことばかりです。ご一緒して下さいました皆様に改めて感謝致します。また、退職に際して関連するシンポジウムを企画・運営して下さいた小林快次教授と江田真毅教授、田中嘉寛学芸員(札幌市博物館活動センター)、首藤光太郎助教、北野一平助教、登壇して下さいた東洋英和女学院中学部・高等部の同級生の美馬のゆり教授(はこだて未来大学)と共同研究者の藤田良治教授(愛知淑徳大学)、北大での最初の授業の受講生でありその後も研究交流を続けてきた田中嘉寛学芸員、協力して下さいた小林研究室の大学院生、そして参加して下さいた多くの皆様にお礼申し上げます。博物館での時間を皆様と共有する心温まる大事な時間を過ごすことができました。札幌を離れますが、皆様と総合博物館の幸せな未来を祈念致しております。

湯浅万紀子

(名誉教授)



2025年度 後期記録

令和7年10月から令和8年3月までに行われた パラタクソノミスト養成講座

きのこパラタクソノミスト養成講座(初級)
講師:小林 孝人(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:10月4日(土)
定員:10名
対象:中学生以上
参加者:10名

動物考古パラタクソノミスト養成講座(初級)
講師:江田 真毅(北海道大学総合博物館 教授)
日時:11月1日(土)
定員:6名
対象:高校生以上
参加者:6名

岩石パラタクソノミスト養成講座(初級)
講師:北野 一平(北海道大学総合博物館 助教)
日時:12月20日(土)
定員:10名
対象:高校生以上
参加者:10名

令和7年10月から令和8年3月までに行われた セミナー・シンポジウム

土曜市民セミナー
「サッポロクジラ、デビュー 新種が生まれるまで」
田中 嘉寛(札幌市博物館活動センター 学芸員・北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:10月18日(土)13:30～15:00
参加者:77名

土曜市民セミナー
「ヒナミクリ採集地Azumaの謎を解け!～フォーリー神父のラベルを辿る～」
山崎 真実(札幌市博物館活動センター 学芸員)
日時:11月8日(土)13:30～15:00
参加者:66名

土曜市民セミナー
「ミュージアム体験の記憶を未来へと紡ぐ ライフストーリーの観点からのアプローチ」
湯浅 万紀子(北海道大学総合博物館 教授)
日時:12月13日(土)13:30～15:00
参加者:43名

土曜市民セミナー
「キャッサバ栽培を通じて地球の炭素循環を考える」
信濃 卓郎(北海道大学農学研究院 教授)
日時:1月10日(土)13:30～15:00
参加者:24名

土曜市民セミナー
「ヒグマ×学生サークル＝北大クマ研～市民科学による継続調査の秘訣」
吉富 達哉(北大ヒグマ研究グループ・北海道大理学部)
大部 鏡悟(北大ヒグマ研究グループ・北海道大学法学部)
日時:2月14日(土)13:30～15:00
参加者:100名

土曜市民セミナー
「クマ研究あれこれ～47年を振り返って～」
坪田 敏男(北海道大学総合博物館 館長・獣医学研究院 教授)
日時:3月14日(土)13:30～15:00
参加者:119名

令和7年10月から令和8年3月までの主な出来事

10月1日 研究支援推進員 大杉あいさん 着任
10月30日 コンサート&レクチャー「口琴から広がるシベリア サハの世界」
11月1日 第5回建築の学生展(～11/7 11/4を除く)
11月3日 『北海道大学×STV SDGsデー2025』
札幌農学校第2農場ガイドツアー
12月14日 宙カフェ
1月24日 ボランティア講座 & 交流会
2月28日 2025年度卒論ポスター発表会(～3/1)
3月21日 湯浅万紀子教授 退職関連シンポジウム
3月23日 令和7年度研究活動報告会
2025年度ボランティア表彰式
2025年度後期ミュージアムマイスター認定式
3月31日 坪田敏男館長 退任
湯浅万紀子教授 退職
研究支援推進員 山口恵理子さん 退職
研究支援推進員 大杉あいさん 退職

入館者数(令和7年10月～令和8年3月)

	入館者数	見学 団体数	企画展示(略称)
10月	30,281	43	北海道唯一の隕石「Numakai」展示(～11/3) 企画展「クジラの化石展－札幌市博物館活動センターのコレクションより－」(～R8/1/25)
11月	23,991	26	北海道唯一の隕石「Numakai」展示(～11/3) 第5回建築の学生展(11/1～11/7) 企画展「クジラの化石展－札幌市博物館活動センターのコレクションより－」(～R8/1/25)
12月	14,726	11	企画展「クジラの化石展－札幌市博物館活動センターのコレクションより－」(～R8/1/25)
1月	14,311	7	企画展「クジラの化石展－札幌市博物館活動センターのコレクションより－」(～R8/1/25)
2月	21,071	5	ヒグマ×北大クマ研展～大きな足跡、小さな一歩～(～3/29)
3月	18,689	10	ヒグマ×北大クマ研展～大きな足跡、小さな一歩～(～3/29)

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。(令和7年10月1日～令和8年3月31日)

(敬称略)

●植物標本

石川弘晃, 及川美香, 大沼弘樹, 大原和広, 加藤 恵, 加藤康子, 金子と広, 菊地敦司, 城戸崎圭子, 木下愛子, 小嶋照男, 児玉 諭, 坂上美裕己, 佐藤 謙, 佐藤壮馬, 佐藤 ひろみ, 嶋崎太郎, 島田恵実, 田澤かおり, 田中館 伊織, 田端邦子, 島山麻央, 中川博之, 新田紀敏, 萩原法子, 林裕子, 春木雅寛, 藤田 玲, 星野フサ, 本多丘人, 牧野 美奈子, 道川 富美子, 宮本真優, 目黒嘉子, 安富佐織, 矢野ひろ, 矢野滉紀, 山本文子, 山本ひとみ, 横山 耕, 吉川 諒, 吉中弘介

●菌類標本

石田 多香子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上 さつき

●昆虫標本

梅田邦子, 柏崎 昭, 片倉晴雄, 北野千歳, 北野宏久, 鴻上慎吾, 小林弘和, 紺野 鼓太郎, 斉藤光信, 櫻井正俊, 志津木 真理子, 諏訪正明, 高橋誠一, 問田高宏, 戸田正憲, 島山麻央, 永山修, 藤田淳一, 古田未央, 宮嶋 權, 村上麻季, 山本文子, 山本そら, 山本 ひとみ

●考古学

天野哲也, 宇津城 遥平, 遠藤 果, 及川樹也, 太田 晶, 大藪隼平, 奥山杏南, 奥山駿基, 小倉理真子, 小澤陽仁, 小野寺 花愛, 勝島 日向子, 木戸流衣, 木村則子, 工藤智美, 小山夏嬉, 齋藤

春菜, 佐藤 亜希子, 謝 倩氷, 砂山和生, 多久和隼, 田中望羽, 坪内 和, 中川心結, 中島想羽, 長田佳子, 中根真央, 中村芽以, 中山小夏, 二瓶寿信, 原山法大, 平山 薫, 藤岡 晃大朗, 外間央榔, 星山葵衣, 堀 隼輔, 前田大智, 矢倉鉄平, 山川寛太, 吉沼利晃, 劉 旻, 劉 庭璋

●化石

朝見寿恵, 荒山和子, 市橋晃弥, 糸井容子, 白田 みゆき, 宇津城 遥平, 太田 晶, 太田 久美子, 大村 颯, 大藪隼平, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 尾上洋子, 金内寿美, 木村聖子, 近藤知子, 佐藤健一, 武田満希, 田中望羽, 長瀬 のぞみ, 西川香々, 本村 美奈子, 前田大智, 三好礼人, 矢倉鉄平, 山内静香, 山角美夏, 山下暁子

●北大の歴史展示

西東 淳, 高橋道子, 土井茂子, 藤田正一

●展示解説

在田一則, 太田 晶, 生越昭裕, 河本恵子, 西東淳, 堺 俊樹, 笹谷幸恵, 塚田則生, 對馬 旬, 永岡明美, 英美瑚都, 松川 覚, 松田義章, 宮本英昌, 村上龍子, 山崎航希, 山崎敏晴, 山田大隆, 渡部典子

●平成遠友夜学校

石川 満寿夫, 柿本恵美, 金子哲郎, 城下治子, 高橋道子, 土井茂子, 英 昌子, 藤田正一, 山岸博子

●4Dシアター

安部 布実子, 石神早希, 加藤啓子, 佐藤淳子, 佐藤 豪, 田中裕子, 土谷朋輝, 長谷川 健太, 平井由実果, 平田栄夫, 福澄孝博, 前田愛子

●ポプラチェンパロ

石川恵子, 石川弘晃, 小野敏史, 加藤 千加良, 近 祥伍, 新林俊哉, 高橋捺津, 東條真希, 永岡

明美, 新妻美紀, 松田祥子, 森田 杜

●図書

岡西滋子, 今野成捷, 嶋野月江, 須藤和子, 高木和恵, 田端邦子, 中井 稚佳子, 久末進一, 鮎田久意, 本名 百合子, 村上龍子, 山田大隆

●第2農場

石川 満寿夫, 石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大沼良文, 岡川秀幸, 金子哲郎, 西東 淳, 城下治子, 谷口淳介, 花里 隆, 藤井利侑, 毛利伸正, 毛利葉子, 山田大隆, 渡部典子

●ハンズオン

嶋野月江, 須藤和子, 濱市宗一, 福澄孝博, 山岸博子

●きたみてガーデン

石川弘晃, 大江太陽, 佐藤 瞭, 芝村蒼生, 西海航生, 西田藍里, 宮本真優, 森本大貴

●地学

在田一則, 浦口弘子, 加藤義典, 黒澤邦彦, 堺俊樹, 佐藤淳子, 佐藤 豪, 高橋政哉, 高見雅三, 千葉恭子, 辻野淳子, 新井田 清信, 西川香々, 福澄孝博, 間口久美子, 松田義章, 皆川泰輝, 宮崎ゆき

●水産科学館

池上一馬, 久保田 毅, 高 子文, 小杉真弘, 清水悠詩, 城 吉乃, 中山慧太, 二瓶 聡, 濱田幸穂, 林 泰斗, 樋口淳也, 古庄 誠, 松本 堅, 米田徳悦